

## 英魂は故郷・屍衛兵

香川県 竹原 忠行

家族は両親の下に五人兄弟で、私は長男として生まれまされた。大正十一（一九二二）年一月十九日生まれました。家業は米穀商をやっていました。生活もかなり裕福な暮らしをしていました。当時としたらまあ上流の下ぐらいだったと思います。土地柄は日本では一番良い所だと思っていました。瀬戸内海に面し、気候温暖、地味豊か、また台風シーズンには南に四国山脈（石穂山・剣山）系が防風堤となり、人々は昔から弘法大師の教えを守り人情味厚く、これも日本一だと思えました。

こうした環境の中で育ち津田尋常小学校に入学、恙なく卒業し、三本松の県立大川中学校（旧制）も順調に卒業しました。親父は長男ゆえに家業を継承させると言って、ほかへ勤めることはできず、結局親父につ

いて見習いのかたわら家業の手伝いをしました。家には昭和五（一九三〇）年頃に精米機械をはじめ種々の米穀業に必要な機械や、その頃香川県で三台だったとかいう貨物自動車も購入し、手広く商売を行っていました。四国一円を走り回っていたようでした。

日支事変から戦線は拡大し大東亜戦争になり、嚴重な物資統制下に入り、特に米穀類は配給精度が施行され、生活の自由は奪われて総て統制の枠の中の生活でした。

私は昭和十七年徴集の現役兵としてお国に奉公する身となりました。せめて入営するまでは親孝行をしようとして、一生懸命家業に勉強しました。当時個人での自動車使用は不可で軍の許可が必要でした。昭和十五年頃に「軍隊協力商業会」という名称で自動車が使用できたと記憶しています。

昭和十七年十二月一日付にて、善通寺西部第三十九部隊第三中隊に入隊しました。約二週間程度、何も行わずただボサーと日は流れました。外地の現地入隊の

受領者が未到着だったようでした。引率下士官一人と我ら同年兵三十五人で下関に向かつて、十二月十七日、夕闇迫る五時頃、善通寺第三十九部隊を後に出発しました。

下関で乗船し、釜山入港上陸、鉄道にて北進、京城通過、鴨綠江を渡り奉天（瀋陽）から山海関を経て天津も通過してなおも列車はばく進、徐州から浦口に到着して、ここで少し休憩といつて休ませてくれました。同年兵三十五人が一緒になっての行動でした。蔣介石の恩師の墓碑のある中山陵に参拝というのですが、見物というか観光気分でした。孫文碑、陵がありました。

十二月二十五日、南京に到着、大晦日の三十一日に乗船命令で、中国船（ジャンク）に便乗して一月六日に武昌に上陸し、ここでまた汽車に乗せられ、咸寧着です。善通寺出発以来二十日経過してようやく目的地に到着しましたが、中国大陸の広大さを知らされました。ここで鯨兵団第六八八九部隊第三中隊に編入です。この時に認識票を受領しました（現在も保持して

います）。認識票の刻印は「鯨・第六八八九・三中・一九三号」です。上官から「それは貴様達の認識票だ。大切に取り扱い扱え、絶えず五体と共に有るべし、そしてこれが靖国神社への入門時のお札だ」と言われました。以来瞬時も肌身離さず復員まで持っていました。これは私と戦争との証拠品です。

初年兵教育は厳しいと教えられて来ましたが、外地での現場教育でするので自分が想像した程のこともなく、毎日が過ごせました。わが部隊は輜重隊しじゆうぐわいで第三中隊は自動車隊でした。

私は故郷の家に自家用自動車がありましたので、自動車のこととは種々分かっていましたし、少しくらいなら操縦もできたことが他の同期生よりも優位でした。初年兵は軍人勅諭に始まり各「典・範・令」等教冊の教育等を勉強させられ、特に作戦要務令は全兵科の必修重要教科でした。そのうえに各兵科、自分達現役兵は軍の根幹をなすのだといって、厳しかった記憶が残っています。

昭和十八年七月一日、一等兵に進級して、一応兵隊として半人前の取扱いを受けるようになりました。旧制中学校卒業者は幹部候補生の受験資格がありますから、中隊長から幹部試験を受けるようにとすすめられました。自分は軍隊生活をする意志もなく、また同期生三十五人中、十八人が学卒で特幹受験資格者です。自分は初めから断ることもできず受験はしましたが、合格を望んではいませんでした。思ったごとく乙幹にもならず不合格でした。その頃に岳州に駐屯していた第六師団が南の方へ移動する噂がありました。

自分達の第四十師団（鯨兵団）が後任だという命令が出ました。自分は特別業務（特業）でガス兵を命ぜられ、将校一人・下士官一人・兵一人の計三人が岳州南方二十キロの地点に行きました。ここには土佐の小柴連隊が駐屯していました。他の部隊からも多くのガス訓練教育のために来ていました。中支の夏は暑く苦しく八・九・十月と三カ月間少しの休みもなく仕込まれました。将校も下士官も兵も皆同様の教育でした。自分が少し助けられたことは、同郷の大川中学校で一

期先輩が教育係下士官であったことでした。そのため内務的には大変気分が楽だった。ある夜、敵襲があり、全員出動応戦という時にも彼が来て「貴様は他隊の預かりものだ。絶対外に出る事なく、応戦するな。壕内に遮蔽している」と言ってくれました。このように度々助けられました。

ガス教育は、赤筒・青筒・持久瓦斯・窒息性（チビ）の教育でした。最初は発煙筒に着色して訓練し、逐次高度な方法で教育され、飛行機からの霧下散布等で仕上げでした。国際条約で毒ガス使用は禁止していても、このようにクシャミ・催涙・皮膚糜爛<sup>ウツクシ</sup>などの毒ガスは戦争は勝つためにはなんでも有りの状態でした。広大な原野で仮想の発煙筒を焚き、その中を這い回っての特訓三カ月、充分過ぎる程やられました。現隊復帰でやれやれでした。

中共軍の出没がはげしくて討伐に幾度となく出動しました。昭和十九年五月には、臨湘に飛行場建設で出動しました。幅三十メートル、長さ千三百メートルの滑走路造りでした。凹凸直し、土砂の搬送、人力によ

るローラ作戦です。

現隊復帰後、間もなくだったと思います。湘桂作戦が発令され全軍出動しました。自分達は残留の警備要員でした。十月二十日、衡陽地区討伐隊が出動しました。本隊が最大の苦戦中で援軍の急迫の要請の電信があり、自分達一個分隊は二車両に十四人が分乗して出動しました。本隊は先頭車両と最後尾車両とが敵の激しい砲撃で炎上し、中間車両が集中攻撃を受けていました。私達は遙か手前で停車し、三八式騎兵銃に着剣し、銃の安全装置をはずし、田畑の畦のような所に全員散開しました。

逸速く敵の発見するところなり、敵弾は雨霰と頭上を飛び去って行く。私達は盲撃ちに引金を引いて応戦しました。ただ怖気が付き、恐ろしく全身がブルブルと震えていました。今思い出してもこの時の事だけは脳裏に焼き付いています。この時十四人中、九人が戦死しました。戦友の遺体を隊まで運び、火葬用の薪（燃料）集めに苦労しました。

その夜私は屍衛兵に立ちました。自分の軍人生活四

年五カ月の間で、今日一日が一番敵しい日時でした。火葬後それぞれに名札の付いた木箱に納めました。

昭和十九年十一月三十日、排山に到着、輸送任務に専念しました。この冬は自動車の破損事故が有り難渋しました。今冬は零下二十余度まで気温が下がり、中支方面では初めてのことだと申していました。私の自動車のラジエーターの取付部分と機関の一部が破損し、運行不能となり、修理するにも部品もなく、苦勞の末になんとか修理作業完了で面目を施しました。中国に昔からの諺で「南船北馬」というのがあり、真実北方は山岳多く馬で行く、南はクリーク（川と沼）が多く自然船を使用するのが道理でした。自動車も時と所によっては重宝だったのです。

昭和二十年三月十三日、排山を出発して良田地区に到着、当地区の警備及び輸送等の任務で二カ月程いました。同年五月、広東省樂昌地区へ転進命令で行動し、韶州方面に輸送任務につきましました。同二十年七月二十日夜間に反転作戦命令で宜章・坪石等を経て乗船し、来陽―衡陽―湘潭―長沙―岳州と、八月十八日に

ようやく着きました。

八月十八日、岳州にて初めて終戦を知りました。しかしそれが「敗戦」であるとは知りませんでした。一昼夜かけて漢口に到着、八月三十日に九江着、約一月ほど経過した頃、蕪湖の田んぼか畑のような所で武装解除を受けました。この武装解除は、中国人で日本軍は協力して保安隊を編成していた親日派集団によっての武装解除でした。その後、蕪湖にて捕虜として使役に駆り出され、小麦粉の船積作業をさせられました。一袋百キロもあつたのですが、皆真面目に働きました。

翌年昭和二十一年二月八日、南京に着きました。蒋介石軍の自動車隊の教官になれと言われ、上海に米軍の自動車を取りに行き、南京の中国軍の自動車の勉強をする将校も兵を募集して集合教育をしました。一日の日当として手当が二十円だったと記憶しています。約九カ月間、南京においての捕虜生活でしたが、少しも屈辱感なく、中国側も親日的と言うか紳士的でした。

た。その後に理解できた事は、蒋介石国府軍から見ると毛沢東の中国共産党が強敵で恐ろしく、日本軍はただ隣国の友人と言うようだったのだらうと思います。

昭和二十一年五月十五日、南京出発、列車にて上海へ。上海の港には日本海軍の駆逐艦がいました。火砲一切なしの丸裸の軍艦でした。乗船、船足は速く、鹿兒島沖に碇泊、検疫後上陸、復員。時に昭和二十一年五月二十五日でした。四国高松に着いてからここで時間を過ごして、夜陰に紛れて、そっと我が家へ帰りました。なぜそのような行動を取ったか、自分でも不明でした。今もって理解致し難いです。当時の日本青年は大なり小なり私のような気心の人がいいたのではないでしょうか。

その後、日本復興の一翼を担う心意気で、自宅の商売である米穀商に全力を注ぎました。貨物自動車を購入し、昭和二十七年に麦の統制が除外され、米穀商も精米・精麦（押麦等）その他諸雑穀と手広く商い、戦後の不況時代を乗り切りました。これも軍隊で充分鍛

えられ苦勞したお陰と感謝します。歌の文句のごとく「泥水すすり草を噛み」は本当だった。心の片隅に戦のない平和を願っています。

## 大陸戦線の想い出

宮城県 今野 栄 志

昭和十七（一九四二）年八月一日、仙台東部第二十二部隊に入営。中支派遣第一〇四連隊（鏡部隊）第二大隊第六中隊要員として、勇躍懐かしの故国を後にしたのは同年の八月末日。九月二日に宇品港を出帆、上海に上陸、直ちに軍用トラックに乗せられて南京まで行き、ここからは揚子江を船で溯航して越景河という街に到着した。ここで部隊編成後、この地で戦局が急変し我々はわずかに三カ月の短期で一期検閲を終え、直ちに江南作戦に参加した。

大本営は支那派遣軍に対し、重慶作戦の準備を命じ、作戦開始を昭和十八年春以降の予定とされてい

た。このため漢口の第十一軍司令部は、宜昌にいた第六十三師団と第三十九師団を以後作戦のためか、我が青葉師団・第十三師団と交代を命じたのである。第十三師団は、昭和十二年支那事変が始まると歩兵第六十五連隊（福島県若松）、第一〇四連隊（宮城県仙台）により再編成された師団と聞いている。歩兵第一一六連隊は、新潟連隊で第五十八連隊は南方に転戦され、新装の第三十一師団となった。第五十八連隊の警備地であった所に我等第二大隊第六中隊が鴨原中隊長以下警備を継承することになった。

昭和十八年の初頭、昭和十七年徴集の現役初年兵が到着し、中隊の戦力も増加した。新警地には飛行場があつて、一月十日の陸軍記念日を祝し、軍旗奉拜を挙行した。この直後、敵機P51三機が襲来、機銃攻撃の雨を降らせた。我が軍はこれに対し、重機関銃にて応戦、三機中二機を撃ち落とした。我が軍の重機関銃は支那作戦戦線においては威力を発揮し、敵からも恐れられていたのである。当時、敵機を撃墜すると「感